漫画が教えてくれたこと

くさか里樹

本年、日本漫画家協会賞大賞を受賞された、くさか里樹さんの第6回香美市市民大学での講演内容をお伝えします。（9月23日・奥物部ふれあいプラザ）

くさか里樹（本名：佐藤広子）
高知県高岡郡日高村出身。土佐山田町南組在住の漫画家。
高知市内の授産施設に勤務した後、１９８０年『別冊少女コミック』（小学館）にて、『ひとつちがいのさしすせそ』でデビュー。

日本漫画家協会賞
社団法人日本漫画家協会が、日本漫画界の向上発展を図ることを目的に、１９７２年に設立した賞。歴代大賞受賞作品にはゴルゴ１３（さいとう・たかを）、こちら葛飾区亀有公園前派出所（秋本治）、風の谷のナウシカ（宮崎駿）、アンパンマン（やなせたかし）などがある。

ヘルプマンの誕生

大賞をいただいた『ヘルプマン』は介護をテーマにしていますが、私自身は介護をしたことも、されたこともありません。『ヘルプマン』は全て取材を通して、描いています。

今まで、『介護』というテーマはエンターテイメントからは除外されてきました。介護を普通のことに、前向きに応援できる漫画を描きたいと思ったのが、『ヘルプマン』の誕生のきっかけです。

漫画を描けばお金がもらえる

実は、私はもともと漫画を描くことが好きだった訳ではありません。漫画家になるきっかけとなったのは、中学2年生のときに出合った雑誌の懸賞です。

懸賞の内容は、漫画を応募し、入賞すれば毎月５千円が貰えるというものでした。アイスキャンディーが１本10円で買える時代でしたから、漫画家という職業がすごくキラキラと輝いて見えました。

結局、入賞できませんでしたが、「なろうと思ったらなれるんだ」と勘違いのような思いから、漫画を描き始めました。

ゴールがスタート

高校卒業後は、授産施設に就職し、漫画からは一時離れていましたが、プロの漫画家をめざす人を応援していた故・青柳裕介さん（土佐山田町中野）との出会いがあり、再び漫画を描くようになりました。先生の励ましで奮起し、プロからのアドバイスをヒントに作品を投稿して、初めて入賞し、プロの漫画家になることができました。

大変うれしかったのですが、そのとき私は気づいていませんでした。プロの漫画家になることを目標に頑張ってきたのですが、これがスタートで、これから漫画家の世界で生き抜いていかなければならないことに。

他人と比べる人生はみじめである

漫画家の仕事というのは、ネームを描くところに、7～8割の労力を使っています。ネームとはコマ割りや、どのようなキャラクターを出して、どのようなセリフを入れるかということを書き込んだもので、漫画の設計図のようなものです。

このネームを編集部に提出し、チェックされ、ＯＫが出ると、仕上げに入るわけですが、ボツになることもあります。私はどのように評価されるか気にしながら、いつもビクビクしながら描いていました。

編集部や読者の評価を気にして漫画を描いているうちに、「漫画家をやめたい」と思うこともありました。そんなとき、「他人と自分を比べる人生はみじめである」という言葉に出合いました。その時に、編集部や読者にビクビクしながら漫画を描いている自分がみじめだということに気づきました。それ以来、背伸びすることをやめて、仕事が楽しくなりました。

初めて等身大で仕事ができたのは、私の出世作である『ケイリン野郎』（１９８９～２００６）全60巻です。

▲ヘルプマン
介護の現場の厳しい現実を描く一方、高齢社会の明るい未来を探っている。「題材として取り上げられにくい、重要性の増す介護の世界を幅広く描いている」と評価され、今年５月第４０回日本漫画家協会賞大賞を受賞。

足し算で評価しよう

日本人は100点からの減点法が体にしみついており、自分を評価をする際、自分の悪いところを見つけて減点していき、どんどん自分をダメだと思わせる傾向があります。

例えば、自分のいいところを一日10個書き出していくなど、自己評価の際には減点ではなく、足し算の方が良いのです。

ちなみに私は根がネガティブなので、『自画自賛』と決めています。自分を認められる人は他の人も包み込んでいけます。自分を愛することが大事です。

仕事や生活の中で特に心がけていることは、「がんばり過ぎない」「他人と比べない」「自分らしく生きる」ことです。

取材あとがき

「漫画の魅力は、難しい介護などのテーマでも入りやすいところ。実写ではできないことでも表現できること」と話されたくさかさん。ヘルプマンを読んでみると、介護制度やケアマネージャーの仕事の内容も、すっと頭に入ってきました。漫画で介護の現場や問題を勉強できるおすすめの本です。

香美市市民大学

8月25日から9月23日にかけて、第6回香美市市民大学が開催されました。上記のくさか里樹さんの講演を含め、全4講座を481人が受講しました。

8/25 中央公民館
菊池流・魅力的人生のススメ
菊池幸夫さん（弁護士）

菊地さんは、現在も小学生バレーボールチームの監督を務められていること。その指導の過程で、一人ひとりの子どもと真っ正面から向き合い、付き合っていくことによって、子どもから保護者、学校の先生そして地域の方々へと、どんどん人間関係の輪が広がっていったこと。そして、現在もご自分の大切なライフワークとされているといった内容を中心に、いくつかの具体的な体験を紹介してくださいました。

9/8 中央公民館
災害弱者・児童を大災害から守るために
国崎信江さん（危機管理アドバイザー）

大災害から家族や児童・高齢者を守るためには、日々の生活の中で、自宅や旅行先であっても大災害に備えての用意が大切であると話されました。

そのためには、大地震などの正しい情報を学習すること、家庭でも防災・減災のための具体的な備えをすることが重要であることを強調されました。そして、ご自分が家族の中心になって大災害から大切な家族を守りたいと熱意を込めて語られました。

9/11 保健福祉センター香北
知ってて知らない健康常識
松原英多さん（医学博士）

講演の中で松原さんは、長生きの秘訣を「P・P・P……K（ピン・ピン・ピン……コロリ）で間に、ボケをはさまないように、普段から予防に心がけましょう」と、日々の生活の中で簡単にできる予防方法をユーモアたっぷりに話され、会場には笑いの渦が広がりました。

「いろんな方法があると思いますが、とにかく、続けることが大事ですよ」と締めくくられました。